聖書の眞理

第五十一號

一月號

主筆　江原萬里

信仰の進歩　主筆
キリストの十字架　江原萬里
ヱレミヤ記の研究　江原萬里
首都の社會的腐敗
附　讀者の聲
希伯來族長時代の諸宗教　小栗襄三
イエスに由る神の啓示　佐々木良伍
柏木通信　齋藤宗次郎
祖父の書翰　江原萬里
内村先生と非戰論　地を嗣ぐ者
滿蒙の支配者　編輯餘錄

昭和七年（1932）一月一日發行

昭和三年二月十六日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

内村先生と非戰論

或る人云ふ、内村先生が今生きて居られたならば、今頃は定めし大に非戰論を唱へて世人を啓導されて居るであらうと。私は答へて云ふ。多分先生は非戰論を唱へられないであらうと。

先生の非戰論を唱へられたのは日露戰役の時だけであつた。歐洲大戰の際にはそれに代えて、基督再臨論を唱道された。其の前、日清戰役當時は之に反し、大々的に日清戰爭義戰論を内外に唱へられた。先生は常に一つの主義に膠柱されて居なかつた。いつも事實に即し、其の眞相を究め、其の病源を探究し、救濟の道を明かにされた。從來の自說と雖も最早事實に即しない時は、弊履の如く之を拋棄された。そして一段一段と事物の深みに進み、我等を指導されたのであつた。爰に先生の偉大があつた。今滿蒙事變に際し、若し先生が生きて居られたならば、古い非戰論でなしに、新らしい何ものかを提唱されて、我等を啓發されたに違ひないと私は思ふのである。

地を嗣ぐ者

イエスは弟子たちに敎えて言ひ給ふた。

幸福なる哉、柔和なる者。その人は地を嗣がん。

と（マタイ傳五・五）。又言ひ給ふた。

なんぢの劔をもとに收めよ、すべて劔をとる者は劔にて亡ぶるなり。

と（同二六・五二）。武力を以て征服した國はやがて武力を以て覆さる。武力が盡きた時が、其の國運の盡きる時である。かくて地上幾多の大帝國が興り、大帝國が滅びた。バビロン、アッシリヤ、エジプト、ペルシヤ、マセドニア、ローマ、ナポレオンのフランス、カイザー・ウヰルヘルム二世のドイツ、其の他枚擧に暇がない。

然るに古來武を以てせば微弱の民にして、然かも今尙地上に殘存する平和の民が二つある。其の一はユダヤ民族、他の一つは支那民族である。支那民族の歷史は數千年來被壓の歷史であつた。其の表面に躍る政治家、軍人等を別として、國民其の者は默々として壓制者の爲すがまゝに之を忍んだ。而して、今尙其の生存を繼けて居るのである。彼等を征服した北方の元、金、清の蠻人はいつとはなく、彼等に同化され、力を失ひ、遂に呑み去らるゝところとなつて仕舞つた。凡て平和の國民程怖ろしい者はない。

滿蒙の支配者

國土は神の物である。神は其の御心に從つて之を諸民族に賜ふのである。されば何れの國民も其の國土の上に絕對的主權を有しない。神の許容し給ふ限りに於て、領土權を有するのである。若し或る國民が神の御心に背き、其の國土の秩序を保ち得ず、統治を爲し得ざる時は、神は他の民族をして、之に代つて其の國土を治めしめ給ふ。

我が國民は世界に聲明して、滿蒙の地に領土的野心なしと云ふ。私は果して眞に野心ないかどうかを知らない。然し乍ら、假令野心なくとも、神が此の地の安寧秩序のため、又開發のため、之を統治する事を宜しとしへば、必らずそうなる。又假令野心ありとも、神に對して義しくなければ、永久に此の土より逐はれるのである。

國土狹隘　人口增溢の我國民の經濟問題の解決は武力では出來ない。國民が神にして義しくあるか否かできまる。

聖書之眞理
昭和七年一月一日發行
第五十一號

信仰の進歩

主筆

信仰とは、十字架上の死から復活し給ひ、現在活きて我等の靈魂に聖靈を以て臨み給ふ、天地の主、我等の救主、イエスを信ずることである。單に唯一絶對の神の在し給ふことを信ずるのではない。又イエスの教訓の千古に易らぬ眞理であることを信ずるのでもない。又イエスの十字架の死を信ずることでもない。信ずるとは或る人格者に信頼することである。信の對象は道理でない、事實でない、人である、然り、神なる人である。

然し乍ら信仰には進歩がある。其の最初の一歩は、イエス・キリストが我がために爲し給うた善き事を承認するに始まる。即ち福音を聽きて、卒直に之を受け容れることである。此の『福音に從順』より生ずる第一の心的反應は、かくの如き善き事を我がために成し給うたイエス・キリストに對する感謝の念である。

此の感謝の念は我等の心を益々活けるキリストに近よらしめ、益々深く彼を知らんとし、益々多くいつくしみ深き彼の惠に與らんとし、信仰は一段の進境を示し、彼との交際は益々親密となる。彼を知ること深く、彼の崇高、優美、偉大、仁愛、正義を感じて、我等の心高められ、深められゝばらるゝ程、益々一切を彼に委ね、彼が我に代りて活き給はんことを願ふに至る。爰に於て信仰は更に一段の飛躍をなし、遂に彼のために全生涯を悉く献げ、あらゆる苦難を厭はざるに至る。而して彼の榮光の復活は我が物となる。

キリストの十字架

江原萬里

イエス・キリストが我等各自のために成就し給ふた善き事は、只單に善き教訓を與へ給ふたことではない、又自ら先登に立つて荊棘の道を切開き、十字架の苦難を受けて我等に崇高なる模範を示し給ふたことでもない。キリストが我がために成就し給ふた最善にして、我等の思念に過ぐる恩惠は、彼の死其の物であつた。我等は彼の死の意味を知れば知る程、益々彼に對する信仰は加はり、信仰に由つて神に義とせられた事の、如何ばかり大なる神の愛であつたかを悟るのである。

イエス・キリストは何故に死し給ふたか。彼は天壽を完くして死し給はなかつた。人生の最盛期に非業の死を遂げ給ふたのである。彼は敵人のために未だ嘗てなき侮辱と殘虐とを受けて、十字架上の苦難の死を遂げ給ふたのである。

然し乍ら、彼の死は、彼を信じたため虐殺されたステパノを始め、古來幾多の殉教者の死とは違つた。彼は死に先つ數日、自ら敵人に死を挑み給ふた。彼の此の世に來り給ひし目的は、他の如何なる人とも異なり、死すること、即ち、十字架上の苦難の死それ自體が目的であつた。此の死を目的として彼は生き、此の死を死し給ふたのである。

然かも其の死は當時何人も之を理解せず、感謝せず、侮り嘲けり、最愛の弟子にすら棄て去られ給ふた死であつた。否それのみでない。死の瞬間、彼は大聲を擧げて、

我が神、我が神、何ぞ我を棄て給ふや

と絶叫し給ふた死であつた。若し古來人類中、最も神に親しく、最も義しき人ありとせば、彼を措いて他に求め得ない。その心一點の罪を宿し給はず、一點の悔ゆるところなき彼にして、かゝる絶

叫はそも何を意味するか。

爰に於てか、彼の死は罪のための死であり、然かも彼自身の罪のための死ではなかつたことが知られる。然らば誰の罪の死か。それは正しく、我等各自の罪の報を我等各自に代つて、彼自ら受け給ふたのであつた。『人の子の來れるは……おほくの人の贖償（あがなひ）として己が生命を與へん爲なり』（マルコ傳一〇・四五）と彼は言ひ給ふた。

一　彼の死は我等の過去一切の罪の赦を得させんための死であつた。

キリストが十字架の上に於て、我等各自の過去に犯した罪一切、或は肉慾の罪、或は邪惡の罪、其の他ありとあらゆる罪の結果を悉く引受け、其の當然の報である死を、我等各自に代つて死し給ふたのである。神は我等の過去一切の罪をこゝで罰し給ふたのである。それ故に、神が我等に對して降さんとし給ふた罰は、キリストの十字架の死に由つて最早濟んだのである。罰は濟んだ。最早我等にかゝる悲慘極まりなき罰は來ない。キリストの此の死に由り、彼等は靈魂も肉體も沈淪破滅に至ることを免がれ得たのである。我等の肉體は死するであらう。されどその死の彼方に最早何の恐怖すべき審判なく、暗黑はない。

キリストの十字架を仰ぎ見て、彼等が此の事を承認する時、我が心に生ずるものは彼に對する感謝である。又我等が今犯しつゝあり、過去に犯した罪の結果は當然此の十字架の死に値する事を知つて、我が罪の怖ろしさに今更に戰慄し、今まで無關心であり、或は之に興味を感じた罪が憎惡となる。かくして我等は實際生活の上に於ても沈淪墮落に急ぎつゝあつたその道に、はたと立ち留まり得る。我等の靈魂は此の死から復活し給へるキリストに對して一層の信賴を强め、彼の救の御手にすがるやうになる。

二　彼の死は我等の罪の心の死である。

されど我等はキリストの十字架を仰ぎ見て、我等の過去の罪と罰は悉く赦された事を承認するだけであるならば、キリストに對する感謝の心は生ずるが、只之だけで、我等の心の奥底に潜む惡念を一掃する事は出來ない。我等は罪を犯すまじと決心する。然も我等の意志は甚だ弱く、少しの誘惑にも直ちに敗け、心ならずも罪を犯すのである。かくして益々煩悶は增し、良心に苦しめられる。我等の切なる願は、此の良心の苛責から免れんことである。それには二つのことが要求される。

第一は、外から我等を責める道德とその非難攻撃とを排除し得ることである。良心が如何に責めやうとも、又他の道德家が如何に非難しやうとも、之に煩はされない事を望む。

第二は己れ自身の罪の思念が全部死ぬることである。かくして一切の罪を犯すことなきに至ることである。之を要するに、現在の『自己』に死する事である。而して、キリストは我等各自のために、此の死を死し給ふたのである。

我等は聖潔なる性格を獲得し、其の生命に永遠に生きて、それから寸時も死なない事を切望すると同時に、現在の缺陷多く、邪惡なる性格は永久に死して再びそれが甦らない事を切に願ふ。それ故、我等は度々、十字架を仰ぎ見、キリストと共に復活せんがため、彼と共に死せん事を願ふ。否、彼と共に死したと覺悟する。

然し乍ら、其の覺悟は常に事實に由つて裏切られるのである。已に死んだと思ふ事は、事實死んだ事ではない。キリストと共に生きると思ふ事も亦事實生きる事ではない。それは我等には不可能の事である。而してキリストが我等のためにその死を死し、その生を生きて下さつたのである。

彼は我等に代つて、我等の『舊き人』の死を死

し給ふた。それ故に彼に信賴する事厚ければ厚きだけ、その死が我が身に及び來るのである。道德家の非難に對して自ら辯解することを要せず、自己の良心の責めすら無視して、彼に身を委ねる時、視よ、彼の死は我が死なる事を發見する。此の時我がうちに生ずるものは、自己の行爲を辯護せんとする心でなく、憐憫限りなく、正義極りなき彼が、我がうちに生き給はんことである。聖靈は我が靈魂を新に生かし、我は既に過去の世界に住まず、榮光の御國に入り來るを感ぜしめる。

三　キリストの死は聖潔なる生命の授與である。

以上の如く、キリストの死は、第一に我等の過去一切の罪の帳消であつて、未來永劫に我等の靈魂より罪のための滅亡の呪詛を取り去り給ふたものであり、第二に現在我等各自の心のうちに在る邪惡なる心の死であつて、彼を信ずる事深ければ深きだけ、根强く我がうちに蟠居する性格上の邪惡の上に、彼の死が臨み來て、遂にその死を來すのである。然り而してキリストの死は、更に之に加へて、己れ自らの聖善の生涯を悉く拋棄して、之を我等に授與し給ふた死であつた。彼に對する信仰益々深く、己を献げて彼と一體となり、彼が我が內に活き給はん事を願ふ時、彼の聖潔の生命が我がうちに顯はれ來るのである。

彼は云ひ給ふた。『彼らのために、我は己を潔めわかつ。これ眞理にて彼らをも潔め別たん爲なり』（ヨハネ傳　七・一九）と。此の聖潔の御生涯を、彼は彼の死に由つて我等に賜ふたのである。

それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり。すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり（ヨハネ傳三・一六）。

賜ふとは此の意味である。神の愛は、キリストの十字架の死に於て明瞭に顯はれた。どの位深く彼の死を味ふとも味ひ盡し得ない。

エレミヤ記の研究（五）

首都の社會的腐敗

江原萬里

義人なし

エレミヤが幼少の時から育つた、鄕里アナトテはユダ國の首都エルサレムを去る東北二里程の處に在る一農村であつた。彼の父の家柄は祭司であつて、多分嘗て契約の櫃を守護して、イスラエルの民のうち顯榮の職に在つたエリの流を汲んだものらしい。されば彼は母胎に造られぬ前より、イスラエルの宗教については特別の關係あり、生れ出づるや之に深い關心を有された。殊に彼の天性は人に優れた宗教的情操を有し、年少の時より親しくエホバと交はる事を得た。此の宗教的經驗からして、彼は鄕里の人々、さてはユダ國の農村一般の宗教狀態を視察し、それがいたく異教的、肉感的にして虛僞であり、國民的生命の根源、彼等の生存の根據であるエホバより遠く離れ去つたものである事を知つたのである。之れ彼の最初期の預言（第二章一節より第四章四節迄）であつた。

農村の宗教狀態既にかくの如し、さらば首都エルサレムの有樣は如何。彼の鄕里アナトテは、前にも云つたやうに、エルサレムには日還へりで往還し得る道程しかなく、彼は幼時からそこに在る神殿に詣で、又市街を往來し、市場に物を賣る商家の有樣など、何物にも興味を感ずる鋭敏な彼の觀察眼に映じて居た。然るに彼は今や立てられてエホバの預言者となり、此の民の罪を責め、此の國と民との滅亡を預言する重大なる任務を負つた。之を以て彼は一層の注意を以て、仔細にエルサレムの社會的道德的狀態を觀察した。而して首都は其の奧底から腐敗して居る事を發見するに至つた。

一エルサレムの街を往來して
　親しく自ら視察せよ。
市場に行きて探し求めよ、
　若し一人にだにも出て逢ふかと。
唯一人にても公義を行ひ、
　虛言いはじとする者ありやを。
二否『エホバは活く』と云ふ時は、
　僞りて彼らは誓ふなり。
三あゝエホバよなんぢは虛僞を好み、
　眼を誠實にとめ給はざるにや。
なんぢいたく撻つも彼ら痛まず、
　滅ぼし給ふとも苛責を感ぜず。
その顏を磐よりも硬くし、
　歸へり來るを彼らは拒めり。

無產者と有產者

エレミヤは農村の宗教生活がその肉感的、享樂的なる祭禮の表はす通り、眞實でなく、神の民の心田は惡慣習に蔽はれ、不誠實、貪慾、奢侈、殘忍、肉慾的放恣の雜草が生ひ茂つて居ることを洞察したが、首都エルサレムの有樣は、これに勝るとも劣らない社會的腐敗の存在するのを視た。

都人の社會的道德の腐敗中、最初に見聞したのは下層社會の虛僞不誠實であつた。街上に物を商ふ小商人が桝目をごまかし、不正品を賣りつけ、約束を違へ、只利益を掠める以外に餘念なく、勞働者は怠惰にして目先をごまかして誠實と勤勉はない。彼らのうち一人でも本當に正直に商賣をなし、義しい眞面目な仕事をして居るものがあるかを驗べて見たが、一人だにそれに出逢はなかつた。彼らは正直らしく誓ふ。然しそれは女郎の證文程の價値もない。

彼らは義しき神の在し給ふことを知らない。それ故商賣に失敗し又職を失ふ時、その不幸は彼ら

の罪の懲罰である事を悟らない。『いたく撻つも彼ら痛まず』である。反つて益々心を頑固にし、自己の失敗は自分の才智が足らず、詐術が拙劣であつたとして、之を悔ゆる。彼らは『苛責を感ぜず』反つて不幸に陷つた時は、それを救はない神を恨むのである。彼らが神を思ひ出すのはその時だけである。そして『神も佛もありはしない』と云つて再び神を棄てる。

エレミヤは此の樣を見て思つた。彼らが不誠實であり、眞宗教に無關心であるのは、彼らが無教育の爲めである、その無教育であるのは恒産がないからであらう。されば此等のプロレタリアート以外のブルヂョアを訪ね、又社會の指導者である知識階級と語らば、多分彼等は眞の神を知り、義しき心を有つて居るであらうと。然かも彼等も亦、とくの昔に束縛を脱して自己本來の我利我利盲者である事を發見した。

四　われ思へらく此等は無產者、
　教育無き者にしあれば、
　彼らはエホバの道を知らず、
　神の作法を心得ぬなりと。

五　われ身分ある者にゆき、
　彼らと共に語らまし。
恐らく彼らはエホバの道、
　神の作法を心得うならん。
あゝされど此等も亦軛を折り、
　そのいましめを斷ち切りぬ。

神の家畜イスラエルの民がいましめを切斷して放恣の曠野に出で行けば野獸の襲ふところとなる。

六　されば叢の獅子之を打ち、
　曠野の狼彼らを殺し、
彼らの町々を豹うかがひ、
　町を旅立つ者を裂かん。

ダンテの神曲地獄篇第一歌參照、獅子は暴虐、狼は

食慾、豹は肉慾。
そは彼らの背きは多く、
彼らの墮落は甚だ大なり。
七いかで我汝の罪を赦さんや。
汝の子は我を棄て、
神にあらざる神に誓ふ。
我その願に由り彼らを蕩し
娼家を己が家となさしむ。
八彼らは暴れ狂ふ牡馬なるか。
互に嘶きてその友の妻を慕ふ。
我かゝる事を罰せざらんや、
エホバの御言。
この民の上に我自ら
仇をかへさで置くべきや。（第六章）

彼等は表面は上品で、教養あり、甚だ精練されて居るが、其の生活に餘裕あり、食ふに困らぬだけ、放恣であり、淫蕩である。あゝ上流階級の此の腐敗、彼等は『互に嘶きてその友の妻を慕ふ』。

プロレタリアートの誠實の缺乏、ブルヂョアの淫蕩、此の二つが、丁度我國の創始、神武帝時代に於けるヱルサレムの都の社會的道德的腐敗の最も顯著な特色であつた。如何にそれが昭和の現代に似たことよ！

ヱレミヤは身自ら親しく神と相交つて、神に仕へるには何よりも先づ誠實であらねばならない事を知つて居る。誠實なくして見えざる神との交際はあり得ない。若し見えざる神に對して誠實であるならば、見ゆる隣人に對しては常に誠實ならざらんとするも能はない。隣人に對して不正不義であり、譎詐變謀を弄するのは、その者が心のうちに、見えざる神に對して義しくないからである。

ヱレミヤは至誠を以て神と親しく交はると同時に、彼の人なつこき性情は常に人に對しても何等

の城壁をも設けずして交はり度く思つた。然るに人はかやうに不實であり、相互に疑ひ、少しの油斷も隙もなき有樣を見て、彼は孤獨を感せずには居られなかつた。そして神は此の民に對して彼以上の孤獨であり給ふ事を感じた。

彼は又神と交はる時常に靈魂の最高の喜を感じ、聖い靈感に滿された。人が肉慾の快樂に耽けるのはこの清高の想なく、靈魂が永遠を望まないからである事を知つた。エルサレムの上層階級の人々は仕事に閑暇あり、生活に餘裕はあるが、此の閑暇と餘裕とを以て神を探し求め、神に仕へやうとせず、或は美術や遊藝に日を過すのを見た。一度神を棄て背敎者となつて、美術文藝に耽ける時は、人は必ず肉慾の虜となる。そして『互に嘶きてその友の妻を慕ひ』『娼家を己が家とする』に至るのである。之を見てエレミヤの心は痛んだ。有閑の上流階級の背敎者に姦淫はつきものである。

社會の指導者

かやうにエルサレムの市民には、上も下も、最早神はない。都は罪惡の巷となつた。そこでは陷穽を設けて人を陷れ、自らその地位を奪はうとする者、弱者を酷使してその勞働を搾取し、政權を利用して自ら巨財を蓄うる者、圓轉滑達、才氣煥發、甚だ紳士の如く見えて然かも冷淡、己を犧牲として人のためを計る義しき者を助けず、弱き者惱める者に對する同情がない。

二六我が民のうちに惡漢を見出しぬ、
　鳥さしの如く身をかゞめて窺ひ、
　わなを設けて人を捕ふ。
二七鳥の滿ちたる籠のごと、
　彼らの家は詐欺の財充つ。
二八かくて彼らは富みて大きく、
　膏にたぎり且つ圓滑、

その惡行はおびたゞし、
彼らは義しき者を助けず、
貧しき者の愁訴を聽かず。

現代は資本主義の爛熟期である。抑も資本主義とは、資本即ち機械、工場、鐵道、電車、船舶、電燈、瓦斯、等が產業上の主たる位置に在り、從つて之を私有する資本家が、自己の資本を有利に活用しやうとして產業界を指導し、多數の勞働者を使用し、一般に生活必需品を供給する制度を云ふのである。然かも凡ての產業經營の直接の目的は、一般民衆の生活維持ではない、資本家自身の利益である。而して資本家が自利を追求する間接の結果として現今の如き巨大の富を造り上げ、一般人も其の餘澤に與つたのである。然かも元來が資本家の利益を目的として經營されて居る產業であるから、勞働者との鬪爭は避け難い。

啻にそれのみでない。資本家は國の政治を動かし、自國の產業發達のため、或は關稅の障壁を高くして外國品の侵入を防ぎ、或は原料供給地、製品販賣の範圍を確保擴大せんとして他國の權益と衝突し、滿蒙問題の如きものを惹起し、又世界到る處に今や大戰爭再來の危機を釀して居る。フランスの金庫は黃金充溢するも、隣國獨逸は賠償金支拂のため外國に販路を廣めんとして之を抑止され、國民窮乏、支那は洪水のため惱み、然かも米國は豐作の穀物の處置に窮す。一方に過剩生產、他方に過少消費、世界的大波瀾は來らんとして居る。

二千六百年前のエルサレムの狀態と其の精神に於て之と大差ない。然かも彼らの預言者は曲學阿世にして、政治家たる祭司は此等の曲學阿世の學理に基いて政治を行ふ。而して一般民衆も亦神を嘲ける此等の學者政治家を歡迎する。

三〇驚くべし、憎むべし、

此の地に行はれ來しことは。

三一預言者は虚偽を預言し
　祭司は彼らの指示に由りて治め
　而して我が民は、あゝ彼らはそれを好む
　汝ら遂に何をか仕出かす。（第六章）

市民もその指導者も皆かくの如し。民衆に媚びる學者、不公正を行ふ政治家、詐欺を以て巨財を蓄へ、日々贅澤三昧に膏ぎる圓滑の富者、不正品を市に賣る小商人、淫蕩なる上流の子弟、何人にも信頼し得ぬエルサレムの市民、これがユダの首都の有様である。

二三賤しき者より貴き者まで、
　凡て皆利をむさぼる。
　預言者より祭司まで
　各々自ら虚偽を働く
一四彼らは我が民の患を醫やすに、
　その患を輕ろしとして、
　『大丈夫、大丈夫』と云ふ、
　この有様で何處が大丈夫か。
　祭司預言者たちの無反省の樂觀主義は最後までエレミヤを苦しめた。
一五その憎むべき所業を難ずるも、
　彼らは恬として少しも恥ぢず、
　赤面することさへも知らず、
　されば彼らは共倒れとなり、
　我訪づれる時眼眩らまん。
　エホバの御言。（第六章）

人力救濟不可能

此等の惡業は只社會の表面だけの弊害ではない。それはエルサレムの市民各自の心底に潜在する、神に對する背反の結果である。若しイスラエルの民の罪が只單に外國の文化に憧れ、その宗教の華麗を慕ひ、肉感的なる儀式を輸入して、之を己が宗教としただけに留まるものであるならば、又此

の事に由つて外國と宗教上、思想上、産業上の提携をなし、國際的融和を計るだけのためであるならば、その救濟は比較的容易である。それは政府を改め、爲政者を易へればよい。嘗てアハブ王の時其の妃イゼベルが、當時地中海の女王と稱せられて殷盛を極めた、商業都市チレのバアルであるメルカアトを輸入して、之をエホバと取替やうとした時、エホバの預言者エリヤとエリシヤが立つて之に反對し、バアルの預言者を殺し、バアルに膝を屈しないイスラエルの七千人を奮起せしめた。彼等はエリウを將として革命を起し、遂にオムリ王朝を顚覆して、『エホバのみイスラエルの神』たる事を確立し得たではないか。

又其の社會的害惡がもつと社會の奥底に浸潤し、『資本主義』の禍害が社會全體に及び、壓制と不公正、暴虐と欺瞞とが甚しい時には、社會制度を一變し、其の組織を全然新たなものにする事に由つて、或は其の弊害は除去し得るかも知れない。然し乍ら、其の罪が只單に政治的罪惡でなく、又支配階級が其の特權に由つて被支配階級を掠奪するだけに留まらず、禍根は上は貴族から下は勞働大衆に至るまで、各自の心が腐敗し、其の靈魂が病み、其の意志が曲り歪つて仕舞つたのであるならば、政治的革命も、社會的革命も、之を除去する事は不可能である。各個人の意志の腐敗が一團となつて外に顯はれて社會的政治的腐敗となつて居るならば、かゝる外よりの革新は一切無效である。

六 禍なるかな、虛僞の市、
　その中にあるものは凡て暴虐、
七 冷水を蓄ふる岩窟のごと、
　その惡を生々と蓄ふ。
　到る處に虐待と搾取とは聞え、
　絶えず我が聖前に病み且つ痛む。

首府の腐敗の深刻な事は到底農村の比ではない。彼等は眞の神エホバに背き、故意に之を拜せず、之に仕へない。彼等は神の敵となり、神を侮る。

一二彼等はエホバを誹りて云ふ、
　神何ぞかゝる事をなさん。
　災禍我らに來ることあらじ、
　饑饉も劍も見ざるべしと。
預言者とよ、彼らは風よ、
　神の御言彼らにあらんや。

一三されば彼等此の事を言へるを以て、萬軍のエホバ斯く云ひ給へり。

一四視よ、吾なんぢの口に在る、
　我が言を焰となし、
此の民を薪となさん、
　その言彼らを燒き盡さん。(第五章)

果して神はないか。神を忘れ、神を侮り、神の罰は來ることなしと云ふか。エレミヤは彼らの不信に義憤を發した。眞に神から遣はされた預言者の預言が、只の空論であつて、その言に實現力がないか。視よ、神は眞實に全世界を支配し、その歷史を創造し給ふ事實を示す日來る。正義の神は此の民の背信を罰せずして置き給はうか。あゝ現代の人々よ、汝ら神を侮り、經濟恐慌と饑饉と大戰爭とは來らず、我ら『劍を見ざるべし』と云ふか、『災禍我らに來ることあらじ』と云ふか。今一層の注意を以てエレミヤとその時代とに學べ。

一五視よ、われ汝の上に遠くより、
　一つの國たみをつれ來らん。

一六なんぢその言葉を知らず、
　語るところを解し得じ。
その箙は開きたる墓、

彼等は悉く兇暴者。

一七汝の收穫と食糧とを食ひ盡し、
　汝らの子らと娘らとを食はん。
彼らは汝の羊と牛とを食ひ、
　汝の葡萄と無花果とを食ふ。
彼らは汝の倚り賴む城邑を、
　劍をもて打ち倒さん。(第五章)

神を忘れ、神に背き、其の敵となり、之を侮る者に神の在し給ふこと、神の正義は現實に彼等に臨むことを示し、心から之を納得せしめるには、今となつては彼等の罪を審判き、彼等の國を滅ぼして見せる以外に道はない。

エレミヤ記研究と讀者の聲

エホバの教が只一本の毛髮によつて支持せられたと云ふ、エレミヤの研究は非常に感深くあります。此の眞髓を傳へ下さるこそ、眞理誌の大使命であります。柏木の兄弟團も此の點迄高められるときに、眞の一致があると存じますが、ゴシップや漫談で悲喜して居る樣では『淺薄』とのそしりを免れないでしよう。他はどうでもよろしくありますが、たゞ御誌のみは至聖所より直接生命の泉を分布されんことを切に望みます。エレミヤ記の續きが早く聞きたくあります。

靈火、主筆の衷深き所に熱して燃え擧り、乍併、主筆の姿は蔭に消えて、視よ、荊間に聲きくは聖なるエホバ、全誌に旺溢するは只是れ聲、神の靈より人の靈へ。謹かに、强く、低迷の空氣を震はして、直ちに耳ある者に傳はる。願はくは祝福『眞理』とその讀者の上に在れ。

謹而先生に申上げます。滿一年間御指導を給はりし御高恩を難有御禮申上げます。エレミヤ記の研究は深く我を導き下さいました。再びエレミヤはバルクを通じて日本の現代に預言なさしめ給ふ、天父のプロビデンスであると信じます。相州鎌倉の一角に在ます江原先生の存在を深く深く神に感謝致します。

希伯來族長時代の諸宗教（一）

小栗襄三

希伯來民族の倫理的唯一神教の發生は、此れを其の民族性の要求に伴ふ必然的歸趨の結果、自然的發生を爲せし宗教と認むるか、或は彼等にのみ啓示された獨異的性質を帶びし宗教にして天啓的と認むるか、の問題は我等の信仰的立場を明瞭にする上に於て重要なる問題である。

前者の見界を保持するならば、希伯來宗教も亦一般的宗教の如くに進化の道程を辿り、文化の思想的階程の一物産となり、各時代の要求に隨伴しその本質と屬性の時代相の包含能力に優超性を認め、宗教の終極性（finality）を高唱する事に由て必然性と普遍性を要めんと爲す、斯く自然的發生として希伯來宗教を解釋せんとして起りし學派に十九世紀の末葉、系統的に舊約史を裁斷したベルハウゼン學派又宗教歴史學派がある。併し起原はスピノーザに在るとは云へ、科學的體系を形成したのは彼等である。後者の見界によれば、完全なる宇宙を支配する極對なる神、其者が人智と其社會の進度に伴ひ、彼自身を啓示する事に宗教の本質と其屬性の漸進的顯現を認め、神の自己顯現の最高峰を基督に在りとなし、宗教の絶對性（absoluteness）を高唱し、神その者を必然的普遍妥當的な性質と爲す、即ち天啓的宗教として解釋せんとなすは所謂正統派神學者の一群であり、彼等は啓示的解釋に止まらず、舊約史を贖罪中心に解釋し同時に權威を聖書に要めんとする。

而て兩學派の解釋する希伯來宗教の材料は何に據るかと云へば、勿論聖書である。此れをベルハウゼン學派又宗教歴史學派は彼等の立場を基礎附ける可く材料の取捨を思想的階程に重きを置き、原始宗教の發達より倫理的宗教に到達する進程を

進化論的に取る。併乍ら原語學的論據は比較的に薄弱であると云はねばならない。此に反し正統派は思想的發達よりも、學的立場の然らしむる結果は比較原語に重きを置き、所謂正統派神學に忠實なる餘り前者に對し部分的辨駁論多き憾なしと云ひ得ない。然らば現在雙方に確固たる材料と客觀的證據が在る乎と反問するならば、化學者が試驗管内に其結果を明示するが如きものは其性質上持合せないし、又裁斷す可き學識は無い。舊約を繙くならば、前者の說にも後者の說にも首肯し得るのである。然らばヨリ確實なる論證を得る爲めには聖書そのものよりも、外的證據を獲る事が出來たならば、その可能性を基礎付ける事は出來ると云へる、其外的證據になる唯一の材料は、希伯來民族と關係を持つスメル、バビロニヤ、アッシリヤ、エラム、メデス、ヒクイト、シリヤ、エヂプト等の近隣諸國の文獻であり、考古學に由る實蹟の發掘に外ならない。幸にも近代文明の利器、航空機の發達と寫眞機、特に最近の航空寫眞術と、空中測量の發達は斯學界に貢獻すると共に、古代の文獻學的研究の驚異に價する進展と相待ちて、舊約史の歷史的背景を明瞭にしつゝある。即ちメソポタミヤ地方一帶に、パレスチナ、エヂプトに組織的發掘の行はれし結果は、十九世紀の中葉迄我等の想像を許さざりし資料を供給するに到つた。

現在斯る文獻學と考古學の提供する材料は、聖書批評學に多くの新材料を供給するも兩學派の基礎に決定的證據を與へ得ない。併乍ら、大體に於て正統學派に有利に展開してゐる事は、舊約史そのものゝ史實性が明瞭になつて來てゐる點に於ては云ひ得るのである。此點ベルハウゼン派、宗教歷史派は希伯來民族史に補筆の要ありと云はねばならない。

而て我等に與へられた現在の新材料によつて爲

し得る事は、希伯來民族の族長時代、又は遊牧時代即ちアブラハム時代よりモーセに至る約一千年間の希伯來宗教と同時代の他民族の宗教、換言するならばバビロニヤ、アッシリヤの宗教と、エヂプトの宗教と、カナンの宗教とを比較し得る事である。此の時代の希伯來宗教はモーセ時代の劃然たる倫理的唯一神教を構成する以前であり、希伯來宗教の發育期又は構成期であると見る事が出來るが故に、此時代の宗教を同時代の異邦の宗教と比較する事は、彼等の宗教の如何なる性質にあり又特異なものであるかを認識し得ると共に、或程度迄自然發生による構成であるか、又天啓的發生として認む可き乎を云ふ點に多くの暗示を與へるものであり、又現在外的證據により爲し得る唯一の道である。

ユーフラテス河畔に發達したアヌー、エンリル、エアの三位の神、又シン、シャマシ、アダッドの三位の神を中心に、マルドウク神、アシュア神に唯一神教的性質を發見する迄に到つたバビロニヤ、アッシリヤの宗教と、各種族間に於ける唯一神教的性質が集合してオシリスを中心に未來觀念に迄も到達せしエヂプトの宗教と、バール、アシタロテ、ネボ等セム族系の諸神に地方的屬性を附加して構成せしカナンの宗教と、ヱホバの神のみを唯一神とせし希伯來宗教との比較は、文獻により、又神像により、多くの暗示を與へるものである。何の勢力をも權能をも持たざる遊牧民が偶像禮拜の諸國間を放浪し、しかも彼等は黃金に輝く神像に額かず、確固たる信の上に活きた事は彼等に取つては終極性のものではなく、絕對性の宗教であつた事は明瞭に知り得るのである。次號によりバビロニヤ、アッシリヤ、エヂプト、カナンの宗教に就て一瞥せんとす。

イエスに由る神の啓示

佐々木良伍

試みに文明史を繙く。其處には如何なる民族にも或種の宗教又は信仰のあつた事を發見するであらう。其の宗教の種類又高下の別はあるにせよ、何らかの形に於て宗教が存してゐるのである。人間よりもより高きあるもの、力あるものゝ存在は殆ど疑ふべからざる事。個人としても、また社會としても神と呼ばるべきものを認め、其神恩に賴り、其保護を享けんと冀ふ所の事實は、人類の歴史の明かに證明する所以である。其昔パウロがギリシヤの都アテネに於て『知らざる神々』と記るされたる祭壇を見出し、圖らずも其處に神に向ふて止まぬ人間の至情を讀んだのであつた。吾人をして虛心平氣裸々たる一個の魂に立歸らしめよ！誰か天にある、手にて造らぬ、永遠の家を憶はぬであらうか?! 些細の事に鈍り易き理性意志、忽にして消ゆく幻滅の悲痛、是のみは所有の最後と思はれたものまでが圖らぬ嵐に脆くも壞るゝ健康、生命、財貨、げに見ゆる者は暫時である。人生歸心多し、失意の極靈眼の開かれし熊谷直實の如き人、得意の絶頂に達し、反つて人生の空虛を痛感せし秀吉、ソロモン王の如き人々、そのいづれにもせよ、人心の奥座には、名譽も、財寶も、權勢も、成功も、戀愛も、到底換へる事能はぬ抗し難き要求が秘められてあるのである。

眼あれば光あり、肺に空氣あり、蚕孵へれば桑の萠え、嬰兒には乳の備へらるゝがある。靈あり、無限を追ひ眞理を慕ふ。求め、索ね、門を叩くに、神の天國の無い事があらう乎。罪あり、潔められむ事を願ふ。誘惑あり、救はれむ事を求む。あまたの病ありて泣く、此の滅亡の姿より釋かれむ事を欲す。神の無限の義とみ翼の蔭無くて適はうか。

人は人を欲し、心は心に呼びかけむとす。靈魂は拜し、愛し、且つ生きんが爲に神と其の無限を要求する。鹿の溪水を慕ひ行く如くに、人靈は生ける神を呼ばはり、渴けるものゝ如くに神を慕うて止まない。無限の眞實、無限の義、無限の贖ひ、無限の憐み、是人類永遠の祈望で無ければならない。『我らに父を示し給へ然らば足れり』。ピリポの此の質問は萬人の質問である。然らば我らは如何に神を尋ね索すべきか。

試に自然界を觀る。其處には神の偉大なる働、智慧又力、その姿の顯れを、眼ありて見ゆる者は見るであらう。化學者が樣々なる藥品と强烈なる熱と試驗管とビーカーと、あらゆる工夫手段を以てして、尙一粒程の澱粉も造る來が出來ない。然るに、柔かな太陽の光を浴びつゝ、見えざる地下水を根の毛管を傳へて供給をうけつゝ、無限の大氣を靜に呼吸する側ら、そのうちより必要のあるものゝ分解同化を行ふて、綠の全面に於て音も無く澱粉を製造し、生々發育する樹々草々を思へ。又物理學と機械學と氣象學と凡ての航空學とを以て、あらゆる工夫、あらゆる準備、あらゆる努力を傾けて、以て太平洋飛行橫斷を辛うじてした。然るに、眇たる一塊の肉なる燕は、何らの煩慮と何らの苦鬪と食料と燃料との心備へも無くして、年々その節に到れば幾百千里の波濤を喜々として飛翔し去來するでは無いか。路傍の一草に宿る露に、秋空に遊ぶ蜻蛉の翅に、自然界を通じて顯るる神の大能と智慧とその妙技は、計り盡すべき限りで無い。故を以て古今の詩人は、自然界の美、自然界の現象を觀て、其中に働き給ふ神を讃美して措かない。『ヱホバよ汝の事跡はいかに多なる、これらは皆汝の智慧にて造りたまへり、汝のもろもろの富は地に充つ』(詩百四ノ廿四)。我らは斯かる所に立つ、乏しき所があらう乎。讃美の聲が揚ら

ぬを得やう乎。イエスは空飛ぶ鳥を指し、野の花を見給ふて、神の愛護の豐なるを敎へ給ふた。げに『もろもろの天は神の榮光を顯し穹蒼はそのみ手の業をしめす』。我らはその故に神を讃美して措かない。

然し乍ら自然界の美妙の無窮を以てしても、神が人に對して如何なるみ旨であり給ふか、神が人と如何に交沙し給ふかは、直ちに茲に顯れて居らない。それ故吾人の靈性の欲求はいつまでも滿さるゝ事が出來ない。其は恰も美しき邸園に案内せられても、招待者なる主人の親しき待遇を見ぬ迄は不滿であるのと同然である。

我らは又哲人、賢人、學者、預言者、詩人と呼ばるゝ人々の說く所、敎ふる所に聽いた。そこには何らか宇宙の實體なる神の姿を傳へて居るもののやうである。乍然古來の聖賢、預言者、詩人達が、如何に神の存在を說き其性質を敎へても、吾人はその所說によつて、直ちに神の恩惠を感じ、是に歸命しやうとする熱心が湧いて來ないのである。其は恰も親の人物論を百方說明されても、親と偕に居り其愛に居らざれば、親の親たる所のわからぬと同然である。宗敎の事は頭腦に訴ふる議論、耳目を樂ましむる外形以上、もつと〳〵眞面目なる心情に觸るゝ無限の要求である。

然り永遠を憶ひ神を懷ふは人心の衷最も深刻なる眞實なる部分である。人類は其初より世界到る所に於て、神を求めつゝあつたのである。茲に於て當然次の如き實際問題が起るべきである。

神若し眞に實在し給ふ者であるならば、人が彼を求むるやうに、彼は人を求めて居給はぬか、人が彼を知らむと欲して居るやうに、彼は人に自を知らしめむと欲してゐ給はぬか否かといふ事である。茲に此疑問に確答を提供するものが即聖書である。聖書こそは徹頭徹尾神を第一とし本意とし

て神の立場より書き下されてある。其處に吾人は人を求め人に近づかんと欲しつゝあり給ふ所の神、人に己のみ旨を啓示せんとしつゝある所の神を見るのである。聖書の聖書たる所以、其の中心特質は、自己を啓示し自己を分與せんとする神を吾人に紹介する點に在る。何といふ偉大な又不思議な本であらう。之に筆を執つた人が殆五十人、そこには政治家あり、王公あり、詩人あり、漁夫あり、牧羊者あり、稅吏あり、種々なる階級の人々が、時代を異にし、場所を違へ、或者は宮殿に於て、或者はアラビヤの野に於て、或者はユダの平原に於て、或者は獄中に於て、或者は孤島に、又或者は陋屋に、各々境遇を異にし、約千五百年間の長きに亘つて、書きあげられてある。而も舊新約を貫く大精神は上述の如くであつて其間何らの寸隙も見ないのである。

神が御自身の發意より、人類を救はんと働きかけ給ふ所の啓示は、耶蘇基督に於て絕頂に達したのである。舊約に於て此の最高の啓示に達する迄の道程を、四福音書に於て啓示そのものを、書簡に於て此の啓示の直接の結果を見たのである。

『言は肉體となりて我らの中に宿りたまへり、我らその榮光を見たり、實に父の獨子の榮光にして恩惠と眞理とにて滿てり』。イエスはピリポの問に答へて曰ひ給ふた『ピリポわれかく久しく爾曹と偕に在りしに未だ我を識ざるか、我を見し者は父を見しあり』、彼を見たものは神を見たものであり、彼を識つた事は神を識つた事であるとの意である。アーメンである。其の通りである。聖靈の恩化により茲に神と其の義を尋ぬる者の確答を發見せし靈魂は福ひである。我ら自然に神の觀念を持つと雖朦朧として捕捉する所が無い。自然界の顯す所、人の說く所、人間の美はしき性情の示す所、未だ以て我儕の心に明確に神を啓示する事

が出來なかつたのである。獨り、耶蘇基督に至つては、今迄朧朦たりし神の姿を燎乎として顏前に見るやうである。孔子は『……不善改る不能是我が愁なり』といひ、モハメッドは左手にコーランの經典を揚げて其の教を强迫した。我が教を奉せよと云ひて我を信ぜよとは云ひ兼ねた。釋迦は又我死すとも我教は死なない。とは言ふ事が出來た。然し乍ら、『凡て勞する者、重荷を負ふ者、我に來れ、われ汝らを休ません』と直ちに御自身に招き而して彼に行くものに安息を約束し給ふ事をしたのは只獨り耶蘇基督あるのみである。

宗教家は道に就て說き預言者は眞理に就て傳へる。乍然、耶蘇は道そのもの、眞理そのもの、生命そのものであつた。『われは道なり眞理なり生命なり。われに由らでは誰にても父のみ許に至る者なし。汝らもし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら是を知る、既に之を見たり』と（約十四ノ六）。又曰ひ給ふた『我と父とは一なり』と。イエスをさし置いて人類は眞に神を知る事は出來ないのである。

以上、神を尋ねて、人間の側に斯くも眞劍なる努力奮鬪あるにも關らず、人は自ら靈魂の永生と肉體の不朽とを造り得ず、人間の側より天に達する事は出來ないが、神の最深のみ心により、救は天より開かれた。その事は此のイエスの生涯と其死を見る事によつて明白である。イエスは嘗て善き羊飼ひの譬を語つた。善き牧者は其羊の爲にいのちを棄つと敎へた彼は、迷へる羊全人類を救はんが爲に自生命を棄てたのである。十字架の上なるイエスが、ちしほのながるゝみ手をひろげ、いのちをうけよと招き給ふ。神は今日も招いてゐ給ふ。人々神に歸れ！　イエスに於て神に立歸れ！

主筆曰、佐々木君は熱信なる青年である。私は此の原稿を得て喜んだ。宗教學に興味を有つ者は此の文と小栗君の文とが同一問題を取扱つて居ることを知られるであらう。

柏木通信（第十三信）

齋藤宗次郎

柏木の近狀　恩師邸を圍んで晩秋の庭を飾りし幾株の紅葉、樹梢を謝して後は、紅白の山茶花霜に耐えて、可憐の瞳に造主の惠みと力とを示して居る。此處に清く靜かなる生活を營まれつゝある恩師夫人には、朝毎に洒掃の勞を樂み、南椽の椅子に凭りて聖經に親まるゝを見る。時に籬外を往返しつゝ、門内を覗き、懷古の眞情を表現せられし本間氏あるかと思へば、黄昏に爽快なる歡喜哄笑の聲を響かす石原氏、初更に醇朴なる青年の意氣抱負を擧ぐる濱田氏などあつて緊張せる空氣の内外に波打つを覺ゆる。げに生命は色々の形となつて神の國を築き行くは嬉しいことである。○全集の室は寂として音は無い。相變らず無言の業である。見えざる力が常に其處を支配し給ふのである。○雜司ヶ谷より多磨への墓地改築は一問題であつた。其可否に就ても隨分苦心考慮せられたらしい。結局可と決するや名古屋氏實行の勞を負ふこゝなつた。十一月十日余は恩師夫人と共に多磨墓地に到り、五彩を矜る公園氣分の墓域を巡り、同氏の豫定せし二三の候補地を比較檢分して最適と見ゆる一區劃を指定した。亞いで所長並に府の好意の下に認可の運びにまで進んだ。故人に對する愛と禮とに於て缺くる所あつてはならない。

新約之研究休刊　該誌の發刊と其繼續の純潔高貴なる精神に深甚の敬意を拂ひ來りし余は、突如其休刊の理由を讀んで更に大なる尊敬と同情と感謝とを禁じ得ないものである。十が十まで灰色を脱し得ず、公道を蹂躙して恥を感ぜざる現代の思想、精神、信仰界に、此武士的英斷の擧に遭遇して噫々我今善き一事を見たりの感がある。主筆鈴木氏は謙虚の故に敢て前後の事情を赤裸に公表せざれど、軈て自然に判明し來り、目ある人の驚嘆敬服の日の臨むことゝは彼自身の言筆に據らず、或る偉大なる産物の出現と共に信ずる。過る一個年間本誌によつて新約の福音の力を鍼打つ如き犀利の感を以て靈に受けし余は、茲に其終刊號を手にして又新たなる感謝を捧ぐるものである。

全集編輯會議　十二月七日午後開く。名は大袈裟であるが、然し決して軍事的計畫も、政治的主張も外交的掛引も學術的討論もない。只如何なるが聖旨なる乎と靜かに各自の智慧と力とを絞り出して考案を煉り、天に在す議長の聖許と指導とを仰ぐのであつた。材料の蒐集と其整理とに一

段落を告げし後の最初の相談であつたから、其方針の上に著しき進展を見ることゝなつた。選ばれし數名の無名人が八時間も語り合つて後、次回集合の期日を定めて三更偕に家路に向つた。假令任の重きに過ぐるを感ずるも之に伴ふ惠みの豊かなるを思ふて心は感謝と希望とで一杯であつた。

日曜日の集會　集ひ來る教友の顔は輝く。愛の力は一同を綴る。活くる靈に歌なきを得るか、祈なきを得るか。

一、パウロ先生と内村先生　山　桝

日本今日の難局に當つて眞に永遠の價値ある方途を選び得ざるは悲嘆の極である。右傾も左傾も同樣に危險である。此時に際しモーセがヨシュアに對しエホバの律法を悉く守り行ふべしと告げし如く、我等も恩師を以て示されし十字架の教を死守實行するのは、日本をし世界に對し君子國たるの實を現はし得る唯一の道であると述べし後、兩先生の間に其文章、性格、活動、語調、信仰、刺ある身、獨立の勞働、受難、弟子、愛心等多くの類似點のあるは、共にキリストと不離の關係を保ち居たるに因ると論じ、最後に我等も亦ルカの如く奴隷の態度を以て十字架を負ひつゝ勇往邁進せんことを祈ると結んだ。

一、戰時に處する基督信者の態度　寶　田

エレミヤ三〇ノ一〇以下を主題とし、日露戰爭の時内村先生が非戰論を唱へられし時の信仰、決心、苦難を追懷し、我等基督者には聖書の教、神の道を正直に語り且つ行ふの外に途は無い。神を畏れざる國民國家は滅びに至ると叫び、我等の愛する日本國が眞に悔改めて義しきに向ふ樣祈らねばならぬと所信を忠實に述べた。

一、神の經綸に就て　藤　本

我が生活は神の經綸の何處まで織り込まれ居るかを考へることは必要である。神は其被造物に對し夫々理化學的生物學的の性質を與へ自然の法を立てゝ其存在發達を計り給ふ。次に人類には特に良心を與へて道德の法を立て正義の道を示し給ふた。去れど罪の人間は如何に之を主張するも眞の平和は個人にも國民にも臨んで來ない。神は更に最も善美なるものを與へ給ふた。即ち正義の法の外に愛の法を立て給ひしは夫である。而してイエスは之を成就し神の經綸の目的を遂げ給ふのである。我等は日夜此大愛の中に養育まれつゝあるを知つて絶對信賴の生活を終りまで續けねばならぬ。

一、サムエル書を讀む　永　井

此書は我國開闢以前、支那の周の時代にユダヤの地に書

かれたるものなるに拘らず、我等が之を讀んで今日の物の如き親みと理解とを持ち得るは彼も我も根をキリストに置くが爲である。讀まざるべからず學ばざるべからずと冒頭を起して後、其一章より十二章に至るまでの內容精神教訓を明かにした。聖書は側面の事實に留意する時に誤謬に陷る恐あり。聖書は聖書を讀んで天より啓されてのみ正解し得ると實例を擧げて所信を述べた。

洗足會例會　初冬の天空に無數の星光の煌めき渡る夜、淀橋淨水場に隣れる寶田氏宅に開かる。最近歸朝して直ちに大阪に榮轉せる渡邊氏と、近々出航、此冬を聖地に送つて後渡佛せんとする石河氏の爲の送別祈禱會を兼ねることとなつた。十名の教友各々感想又實驗を述べたが、左に渡邊氏が歐洲米國視察檢査の傍、各國基督教の實狀に就て語られし所感の大要を紹介する。

英京ロンドンは注目の中心であつた。知人に選擇を乞ふて二三の有名なる新教の教會に出席した。其說教は別として裝飾、氣分、儀式、聖歌隊、牧師の服裝等甚だしくカトリックの感化に浸つてキリストの至純なる教に緣遠き姿を認め異樣の感に打たれた。スコットランドからの歸途、好本氏の親切なる案內にて有名なる牛津大學を觀、更にテームス河の上流なる仙境に入つて低徊去る能はざるの感を抱くと共に英國紳士出現の原動力が那邊に在るかを想はしめられた。次に海を渡り、淸教徒の跡を訪ふて北歐に進み、代表地と指定せしロッテルダムの教會に安息日を守つた。靜肅なるサービスには感じたが一般會衆の聖書に對する敬意、態度、注意の足らざる態は日本の柏木に養はれし者の眼に强く映じた。南獨逸にルーテルの影薄きは實に嘆はしきことであつた。佛蘭西、西班牙等の迷信國に光を探すの愚を敢てせず、舊教本場の伊太利を巡つて到る處の寺院に於て、無意味の傳統と憎むべき偶像とは白晝憚る所なく人間を跪かしめつゝある樣を見た。アゝ何故にパウロに學ばぬかと憤慨の心さへ湧いた。斯くて歐洲教界觀察後の結論は最早十字架の生命は歐土を去れりであつた。そして夫れと同時に無教會的基督者の使命と恩寵とに思ひ及ばざるを得なかつた云々。我等一同同感の聲を和し讃美の歌を歌ふて樂しき平和の會合を閉ぢた。

モアブ婦人會十一月例會　を余の宅に開いた。遠近より集り來る姉妹十六名、使徒行傳八章の研究に三時間を用ひた。サウロは彼の殺さるゝを可しとせり（一節）と讀み上ぐるを聽きて姉妹等の信仰は燃えた。各々忌憚なく所信所

感は述べられた。余は柏木より歸つて此光景を戸外より察し、眞理は蓄積するのみにては不可、其眞價も判らず進歩も見ない。信ぜよ、祈れよ、發表せよ、實行せよ。此擧に出でし彼女等の幸福は大なりと心に思ひつゝ間もなく庖厨に立つて晩餐の給仕の役に當つた。八時郊外の暗路を踏んで歸り去られた。

鎌倉の親睦會　兄弟相見て互の上に主の惠みを認むる時に愛は湧くが如くに加はる。平和の主に從ふ我等に取つては人生も亦樂しき所である。小春日和の或る日、數名の教友本誌主筆の邸を訪ふた。氏の庭園には未だ霜氣逼らず、百目柿は美大の果を枝間に吊つて花壇を壓し、殘んの蕃茄は紅の豐頰を並べて蕪大根の畑に潤ひを添へて居つた。主客一同七百年の歴史を語る岩窟峯々に圍まれし山居の一室に納つて清談に時の移るを忘れ、日暮れて食堂に集り祈禱と信仰談で暫時別世界を形造つた。不況の雨も戰亂の風も此處には達しなかつた。八時再會を約して別れた。

主筆曰、昨年來靈筆を振つて教友の動靜を報道し、信仰に由るその行動を顯揚されて、讀者の湯望を滿された柏木通信は、此の會合により明年も亦引續き寄稿されることゝなつた。私は讀者諸君と共に筆者に感謝し度い。

祖父の書翰（四）

江原萬里

私は今まで祖父の人物を略叙し來り、彼は他の何者でなくとも、少なくとも誠實の者であり、一意赤穗藩のため、津山藩のため、又日本のために盡さうとした者であつた事を述べた。それは其の必要があるからである。

何故なれば、現今我國最後の仇討として、小說に講談に又傳記に由つて傳へられて居る前述の赤穗藩士十三人が、國老森主税及び用人村上眞輔を殺害したため、眞輔の子行藏等が父の仇として、明治四年に至り高野山に於て十三人の殘存者六人及び其れに隨伴した少年とを皆殺しにした事件を述ぶに當り、必らず事の發端として、前に記した祖父の財政改革事件を擧げ、此の改革は祖父が獰奸邪智、自家の榮達を謀つたものであると說明し、祖父が森主税及び村上眞輔のため藩を追放せられた後、藩の實權が此の兩人の黨派に歸するに及びて、之を恨んで十三人が其の頃祖父の事件に坐し蟄居閉門中の反對派の領袖森續之丞を世に出し己が目的を達しやうとして、遂に此の兩人を殺害するに至つたと叙述して居るのである。

祖父が其の始め財政の急を救はんがため、世子忠弘と謀り、名を留學に借りて茶坊主を辭し、大阪に出て事を計らうとした事について、『高野の復讐』と題する書には、次の如く祖父の人物を批評して云ふ。

寅哉（祖父の舊名）は學問と才智とは勝れて居つたが、根が輕輩の家庭に人と爲つただけに、士魂が養はれて居ない。それに彼は二十歳を踰えて漸つと三年と云ふ青年で、思慮未だ定まらず、第三者のために動かされ易い時代であつた。幾度となく重職續之丞より茶頭役には過ぎた人物である。惜しいものだと唆されて、いつとなく恩師の教訓を忘れ、慢心を起し、師の駱之輔よりは、當時大殿の膝許にありて羽振りを利かす大身の傘下に立つ方が立身出世の捷徑であると思案を定め、安政三年も暮れむとする臘月（忠世公御在世の時）、突然御役儀御免を願出た。

祖父は十八九歳の時は既に鹽谷宕陰を師とした。こゝに記してある『師の駱之輔』事村上眞輔の子河原駱之輔は祖父に長ずること五六歳、祖父は子供の時彼から『いろは』を學んだかも知れないが、彼を師とはしなかつた。更に滑稽なのは、次の文章である。

清廉潔白なる駱之輔は、寅次郎が自分の厚意を無視したのに立腹したが、ソレは兎も角藩廳へ對して責任上其の儘にさし措く譯に行かぬ所から、斷然師弟の緣を切るべく、寅次郎に對して『破門』を宣告した。……寅次郎も此の痛棒には非常なる苦痛を感じ……破門御赦免の上は再び江戸に出で、鹽谷宕陰先生の門に入り……過を償はんとて百方謝罪したので、駱之輔も……漠願を容れて破門を取消し、宕陰への依頼狀をも與へて江戸に出立さした。

駱之輔の書狀を要せず、彼は其の前既に宕陰の門下に在つた。事實は駱之輔が祖父の學才を忌んで其の留學の願出を抑止したから、隱居して赤穗を出たのである。世子忠弘の祖父に與へた前揭書狀の如きは勿論知る筈がない。

又忠弘の遺言に由り勘定奉行となつた時、森主稅が藩主に其の罷免を强要した箇所に、

鞍懸寅次郎が慢心を起し、君恩を忘れ、師恩に背き……彼の人格を批判し『いづれにしても藩の財政整理、經濟の立直しと申せば、殿始め藩臣一同結束して立ち、上下一致でなければならぬ、ソレが下輩の身分より取立られた二十四歳の若輩の采配で行はるべしとは思ひも寄らず……必らずしも寅次郎の才智を借るに及ばず』云々。

問はず語りに祖父排斥の眞因が明かにされて居る。かくて寅次郎は破格の拔擢に過ひ頭を擡げたも……二ケ月を經ぬうち、頭梁續之丞始め一味の者と共に、陰謀者として糾斷され、一言の申開きも出來ず、失脚して涙々の身となつた。

のださうである。然し乍ら、祖父の人物については之よりも尙甚だしい誤解が今尙存在するらしい。それは森主税及び村上眞輔殺害事件は、祖父が黑幕となつて姉婿野上鹿之助を手先としてやらせたとの邪推である。此の事は何れの書物にも明記こそなけれ、一部の人々に傳へられ、又前記『高野の復讐』にも野上を宛かも首領の一人のやうに記し且つ之に附するに必らず、『怪傑寅次郎の姉婿』と書くところに思はせ振りがある。それ故、私は一應此等の者が如何にして藩の重臣を殺害するに至つたかを述べやう。此の事件は之を一言を以て云はば、赤穗藩永年の黨爭が積り積つて遂に激發したものである。

抑も、赤穗藩內の黨爭は其の因緣甚だ深く、其の端を此の事件の勃發する凡そ四十餘年前に發して居る。其の頃神吉某なる者が、當時の國老森主税に結托して藩政を左右し、密かに藩主の廢立を謀つた。此の時國老各務兵庫を奉じて之に反對する者あり、彼等は黨爭の結果敗れたが、爾來藩內に二黨の對立が生じたのである。二黨中神吉派が優勢であつて、政權を掌握し、威福を擅にした。祖父の代に至つて村上眞輔が其の領袖となつた。而して之に反對の者は年寄森續之丞を其の領袖となした。永年の黨爭に藩政振はず、財政は極度に紊亂し、藩士は甚しく困窮して、武士たるの威嚴を失ふ者も少なくなかつた。爰に於てか財政の改革は何よりも先づ黨爭の中止を必要とした。祖父が財政改革に關する上書に、藩主は嬖妾を廢し、執政者は黨爭を中止し、協力して、皆生命を抛つて正義を取らん事を要望したのはそのためであつた。

然るに祖父が多大の望を囑した世子忠弘病死したが、其の遺言に由り、祖父が拔擢せられて勘定奉行に擧げられ、財政改革の衝に當つた時、國老森主税及び村上眞輔の强硬なる反對に會ひ、藩主は軟弱、當面の責任者森續之丞は卑怯、憎惡は悉く祖父の上に落下して、遂に藩を追放せらるるに至つたのである。若し改革派に罪ありとして刑の輕重を適當に按配せられるならば、續之丞こそ最も重刑に處せらるべきであつたが、彼は蟄居閉門で事がすんだ。而して此の騷ぎに由り村上一派は益々優勢となり、國老森主税を擁して威福を擅にするに至つた。然かも財政は益々窮乏し、諸士貧困となり一藩に怨嗟の聲が滿ちた。爰に於て乎、十三人が起つて森主税及び村上眞輔を殺すに至つたのである。

然し乍ら、若し事情が只此れだけに留まつたならば、恐らくはかゝる非常の事件は勃發しなかつたであらう。此の

事件の勃發には一個の有力なる直接の原因を要した。而してそれは藩内になく、藩外に在つた。然かも藩外に在つた祖父の劃策でなくして、もつと大仕掛けなものであつた。實に當時日本全國に澎湃として横溢した勤王討幕論、王政復古の運動がそれであつた。

今や日本國は實に内外共危機に際會した。外は英米露國が來つて開國を迫まり、境彊を脅かし、内は幕府の力盡きて諸侯を統御し得ず、强固なる權力を把持して國策を遂行する事を得なくなつた時であつた。我國の危急存亡の此の秋に際し、國論を統一し、擧國一致して外に當るには、どうしても德川幕府では駄目、王政復古より外はない。爰に於てか、京都は新運動の策源地となり、次第に政治の中心地となり、全國殊に關西の勤王を唱ふる諸藩は、祖父が津山藩から命ぜられて京都に遣されたやうに、各々國事周旋掛又は他藩周旋掛の名稱の下に、外交官を此の地に派遣し、互に提携協同して行動を起すに至つたのである。而して此の運動の主動者は薩摩、長州、土佐等の諸藩であつた。

現今我國の社會制度の改革に關し、共產主義を唱ふる急進的革命派と自由主義又は社會改良主義を唱ふる漸進的温和派と現狀維持を唱ふる保守派の三派があるやうに、當時に於ては直ちに德川幕府を倒し、王政を古に復し、以て攘夷を敢行しやうとする勤王討幕派と、江戸と京都との協調を策し、漸進的に改革を行はんとする公武合體派と、現狀の維持を欲する佐幕派の三派對立し、事既に實行期に入つたため、三者の爭は激甚を極め、之がため各所に暗殺さへ頻々として行はれた。

現代の青年が新思想に感奮興激して實際運動に身を投ずる者多きやうに、當時我國を風靡した新思想である最も急進的過激なる尊王討幕論を唱へ、直ちに之を實行しやうとする者は、概して各藩中の青年であり、且つ其の多くは身分低き者であつた。何れの時代にても年少と無產とは急進思想と其の實行の要件である。當時此等の青年が所謂勤王の志士であつて、青年血氣の勇を鼓して或は執政者を殺して以て藩内の討幕運動の促進を企て、或は脫藩して京都に集り、所謂『處士横議』の風をなし、全國的運動の策動をなすに至つた。此等は相互に連絡する所あり、而して此の背後の糸を操る者は前記薩、長、土の諸藩の過激派であつた。

其の頃赤穗藩の青年にして足輕の弟に西川桝吉と云ふ者があつた。彼は早くより尊王攘夷の新思想に觸れ、度々京都に往來し、姫路藩の河合惣兵衞に賴つて薩、長、土の勤

王の士とも交るに至り、過激なる討幕運動に參加した。私は思ふ、彼にして若し今日在らしめば必らず共產黨員として社會運動に從事したであらうと。彼は京都に於て土佐藩の平井收二郎と相知つた。收二郎は彼を使嗾して、赤穗藩を勤王討幕運動に引入れやうとし、兩人互に劃策するところあつた。赤穗藩を討幕運動に引入れるには先づ其の當路の大宮を除き、彼等に代つて彼等のために壓迫されて居る森續之丞一派に政權を把らしめる事が肝要である。それには一藩中に醞釀して居る新思想なる勤王論と、財政窮乏に由る執政者に對する不平とを結合せしめ、以てクーデターを行ふに限ると思惟したのである。

かやうに赤穗藩内の黨爭史は、此の時以來全日本的となり、他藩との國際關係が其の中に入り來た。西川桝吉は專ら同輩の足輕の青年に此の主義を宣傳し、他方森、村上のため壓迫せられて居る彼等の反對派の贊成を得て其の計畫を實行しやうとした。然るに此の反對派の中に山下惠助と云ふ者あり、其の位置より、又年齡よりして此等の同志の黑幕となり、此等を指導し、殺害の方針を定め、殺害趣旨書を起草し、十三人が事を果した後仕末の責任を負ふた。かくして文久二年十二月九日夕、十三人は突然祖父の姉婿野上鹿之助を訪ひ、事情を打ち開け、其の贊成を强要し、其の夜そこから二組に分れ、一組は森主税の下城の途を要して之を擊ち、他の組は村上眞輔の宅を訪ねて之を殺害した。

かやうに野上鹿之助は其の夜始めて此の計劃を知り、又それに贊成を强要されたのであつて、彼は決して此の計畫の黑幕ではなかつた。勿論野上の背後に祖父が居て、之を傀儡として十三人を使嗾し、以て私怨を晴したものではなかつた。祖父は京都にて此の兇行の報を聞き、驚いて野上に其の實否を問合せた一事を以ても、其の事は確實である。此の書翰は惜しい事に紛失して今はない。然るに此の兇行の二日前の日付で、祖父が十三人の眞の黑幕、前記の山下惠助に宛てた左の書翰が殘存して居る。若し祖父が此の事件に關與して居たならば、此の如き手紙は書かないであらう。

一筆啓上仕候……然ば先月は態々姫路へ御出被下、久々にて御面會、誠に難有奉存候。然る處途中段々逗留に相成候間、暫時の御談話、誠に御名殘惜敷候て殘念に奉存候……復又當月朔日津山表出立昨六日大阪に着、今晚船にのる心得に御座候(中略、京都、江戸の情勢を報ず)。當月五日書、兵庫茶店にて、西川桝吉の風見請申候樣存候。桝吉もまたまた京都へ出申候哉。しかしながら六七

年も會不申候事故、見違候て人違いたし候も難計候。拙者同道御座候間聲を懸け不申候。

祖父は勤王主義でも過激なる桝吉を好まなかつたことは他の書翰でも知られる。要するに十三人が當路の大官斬殺事件は祖父には全く關係なく、それは實に二つの要素の結合の結果であつた。その直接の要素は、當時の過激なる王政復古、討幕の運動であり、その根柢となつた要素は、從來の黨爭、藩政の不振であつた。此の鏡に照して彼等の『殺害趣旨書』を讀んで始めて其の文意が理解出來る。今村上眞輔の分を抄錄せば、

一　村上眞輔殿事、漢籍ニ相泥ミ候カ、執政之身柄ヲモ辨ヘズ、皇國ノ大義ヲ更に存ゼズ、(以上第一要素)徒ニ私ノ權威ニ相募リ、之ヲ表ニ飾リ、內心ニ奸曲ヲ相持チ、己ガ隱謀ヲ以テ森主税ニ萬事ノ處置ヲ致サセ、奸曲ノ次第一々擧ゲテ敎フルニ及バズ(以下黨爭失政の糾斷)。

國老森主税に對する殺害趣旨書には『皇國ノ大義』については記せず、先づ其の不謹愼、驕奢增長を難じ、かくては內外の情勢迫り、この儘である時は御家の大事に及ぶと云ひ、主として內政上の責任を糾斷したものである。これを以て十三人中主税を殺害した組は藩に留まつて、內政改革に盡し、眞輔を殺した組は藩を脫逃して土佐藩に走り、內外より赤穗藩今後の行動を導かんとした。然るに兇行の夜、二組共此の殺害趣旨書を携へて夫々大目付及び用番に屆出でたが、彼等は堅く門を閉ざして面接せず、已むなく書狀を門內に投入して、一方は陸より、他の組は海より大阪を經て京都に上り、土佐藩に投じた。而して土佐藩は彼等を國賓の待遇を以て迎へた。

赤穗藩にては此の事件ありて、鼎の沸くが如く騷いだ。一時は『正義、正義』と云つて、十三人は英雄の如くに崇拜せられた。之を以てするも主税及び眞輔が如何に不評であつたかゞ知られる。而して祖父の財政改革失敗の時以來閉門蟄居中の森續之丞は森主税及び村上眞輔に代り、藩の實權を掌握するに至つた。然かも藩の政治は此のクーデターのために毫も改善されず、爾來益々險惡を加ふるに至つた。暴力を以て政治を左右せんとする輩には再考三思すべき事である。次に私は祖父が森續之丞に與へて、善後處置を誤らざるやう忠告した書翰を揭げやう。

正誤　前月號に赤穗藩の此の殺害事件を文久三年祖父二十九歲としたのは文久二年二十八歲の誤。

編輯餘錄

主筆

○昨春病臥以來、近頃私の宅は久し振りに各種の會合で賑はつた。その第一は半年振りに鎌倉聖書塾の人々が今後月一回感話會を開く事になつたのが夫である。第二は過日一年半振りに再び私の同窓の親友の會合が行はれた事である。その三は一年振りに柏木教友會の重立つた人々が打揃ひ來訪された事が夫である

○私の同窓の親友の會合の出席者は、一高教授の三谷隆正君及び帝大教授の南原繁、高木八尺、矢内原忠雄の四君であつた。當日話題は主として滿蒙問題に關連した。各自時局の重大に直面し、眞に我國を憂ひ、基督信者としての立場について深刻に考へた。三谷君は知友間に哲學者として重をなし、南原君は政治學史の講座を、高木君は米國講座を、矢内原君は植民政策の講座を各々担當し、各自の專門的方面よりの意見に私は啓發せられる處少なくなかつた。當日外務省人事課長三谷隆信君が公務多端のため參加せられなかつたのは一同甚だ殘念に思つた。

○此の四教授及び本誌主筆の會談か、若しいづれの雜誌屋もすなるてう、滿蒙問題座談會と銘打つて本誌に掲載せば、人々の興味を喚起するであらうが、時事を論じ得ない本誌として、遺憾乍らそれは出來ない。今後何とかして時事論も掲載出來るやうし度く思つた。

○當日私の發見した事は、各々專門こそ異なれ、信仰を同じくする事に由つて、相互に深いところで一致がある事であつた。話題は内村先生の思出に移つた。先生は古い信仰の人であつて、然かも最も新人であつた。凡そ現代の如何なる方面の重要問題にも必らず觸れ之に對して獨自の見解を遺してゆかれた。その個々の意見が悉く肯綮に當り、妥當であるや否やについては議論もあらうが、かくまで博く深く、眞劍に之に直面し、自己の立場を明確にし、獨自の思想と生活をされた事は甚だ偉大であつた。我等先生に師事して大に教えられ、高められた、と云ふ事に何人も異存なかつた。明年再會合を期して別れた。

○北米より書信あり『何故に無教會主義と純福音主義が併行出來ないのですか』との質問を受けた。併行出來ます。現に内村先生こそは純福音を唱ふるため無教會主義を唱へられた。而して私は無教會主義を唱へない。それは純福音と併行出來ないためではなく、專心純福音を唱へ度いためである。凡て主義は其の人の體驗から出た時生命がある。無教會主義も亦信仰の巨人内村先生によつて生命があつた。巨人去つて後に遺された主義は、往々にして生命と熱とを失ひ、死灰となり易い。かくして教派が生じ、教會が生ずる。それ故私は無教會主義を唱へない。

○内村先生は或る人に『君の今なしつゝある傳道をお止め下さい、セクト（教派）を造る恐がある』と書き送つて、一時其の人を『激しく憤ら』された相である。私も亦『公的提携』派の人に『君の無教會主義をお止め下さい、セクトを造る恐がある』と勸め度いのである。又他の一部の人には『君の無教會主義をお止め下さい、教會恐怖病になる恐がある』と云ひ度い。キリストを信じて我等は飽くまで自由、獨立人である。

○私は今年今少し組織的に内村先生の全思想を研究して見度く思つて居る。やがて本誌に發表する事になるであらう。

謹賀新年（以本誌代賀狀）

江原萬里

聖書之眞理昭和六年度合本

總クロス裝　定價二圓五十錢
本誌保存用として又贈物用として適好　送料不要

思想と生活合本

總クロス裝

第一卷　二圓（送料共）
第二卷　一圓八十錢（送料共）
第三卷　二圓三十錢（送料共）

右三卷共注文の方には五圓（送料共）、又聖書之眞理合本と併せて注文の方には全部にて六圓（送料共）に割引す。

東京市外澁谷町向山九七、聖書之眞理社（振替東京六三三七五番へ申込下さい。

江原萬里著

聖書的現代經濟觀

總クロス裝函入二八〇頁
定價一圓二十錢（送料八錢）

基督教を知らない者にして之を讀んで感じた者が多くあつた。又信者にしてその信仰に確信を得た者も少なくなかつた。

内容抄錄、地を嗣ぐ者は誰ぞ、故郷歸還、運命か攝理か、カリヤの春、士族の商法、胃の腑哲學、鈴木馬左也翁、ガリソン、基督者とは何者か、富の增進、等

著者の署名希望の方は直接本社へ申込のこと。

ゴーデー著　西岡虎造譯

基督の神性

定價二十錢　送料二錢

ゾーム著　金澤常雄譯

宗教改革史

定價三十錢　送料二錢

畔上賢造著

聖書の基督教（近刊）

定價四十五錢送料四錢

聖書の眞理定價（送料共）

一部　二十錢
半年（六部）　一圓十錢
一年（十二部）　二圓十錢
海外一年分　二圓六十錢

拂込は振替東京六三三七五番
聖書の眞理社宛のこと

昭和六年十二月廿九日　印刷納本
昭和七年一月一日　發行

編輯印刷兼發行人　神奈川縣鎌倉町扇ケ谷三四三　江原萬里
發行所　東京市外澁谷町向山九七　聖書之眞理社
印刷所　名古屋市中區流川町一八　一粒社印刷所

基督教書類、繪畫、諸雜誌、發行取次

聖書之眞理及び同誌上に廣告されました書籍は當方に御申込下さらば、御取次致します。其の他何なりと地方在住の本誌讀者方の御用命に應じます。

東京市外淀橋町柏木九四六
發賣所　獨立堂書房
振替東京一九四六八

（昭和三年二月十六日第三種郵便物認可）　聖書之眞理　第五十一號　昭和七年一月一日發行（毎月一回一日發行）

本誌定價二十錢